

記錄小說

非行少年

山本克己著

文通書院

小記
説録

非 行 少 年

児童福祉司

山
本
克
巳
著



文 理 書 院

著者紹介

昭和六年東京浅草近くで生まれ、祖母、両親と平穏な日々を過ごす。昭和二〇年戦争の空襲で両親を失ない孤児院にいられる。その後少年時代を生きたため、ヤミ屋、豆屋、菓子屋等の職につきながら独学自習する。

昭和三〇年(25才)大学入試検定に合格し早稲田大学心理学科に入学する。在学中、学徒援護会の岩波甲三氏と知り合い、身寄りのない学生の集まり「手をつなぐ会」をつくる。

昭和三十三年(大学二年、27才)人生記録『不屈の青春』(初版)を出版。また、アルバイトする優等生に贈られる幣原記念賞を受ける。

昭和三十五年大学卒業、新潟県児童相談所勤務、児童福祉司として児童問題、非行問題に取組み『マイナス一歳からの人づくり』、高田市の『非行白書』『非行少年の処方箋』をまとめ、活躍が期待されていたが、昭和四〇年脳動脈瘤のため死亡する。

昭和四十一年、文理書院より『不屈の青春』の新版が刊行される。

記録
小説

非 行 少 年

¥ 450

1970年3月15日 第5版発行

著 者 山 本 克 巳

東京都新宿区喜久井町51
発行所 振替・東京 196621
電 話(202)9611(代)

株式 文 理 書 院
会 社

- ▽図書目録御申し込みしたい進呈 (印刷大文社)
- ▽本社の本が書店にないときも本社にはありますから、書店に取寄せてくれるよう御注文になれば一週間くらいで入手できます。
- ▽直接御送金下されば至急御送本申し上げます。

書籍コート 0093—142016—7398

まえがき

財団法人学徒援護会
東京学生相談所々長

岩 波 甲 三

上野の浮浪児から早稲田大学へ入学するまでの劇的な記録を書いた『不屈の青春』は、山本克巳君が早大の二年生のときに、私のすすめに従って書いたものだった。

今度の『非行少年』は山本君が早大の心理学科を卒業して新潟県の上越児童相談所のケースワーカーとして非行少年の中にとび込んで仕事をやっていたときに、私が小説を書くことをすすめたもので、私は山本君には小説を書く才能があるとみていたし、山本君がやっているケースワーカーの仕事は、必ずしも世間に深く理解されるところまできていないから、その素材を使って小説として世の中に紹介することは大へん意義のあることだと考えたのである。

私があまりすすめるものだから、山本君もだんだんその気になってくれて、原稿が送られてくるようになった。

山本君は年に何回か機会を見つけて新潟県から上京し、私の自宅を訪ねてくれたが、三、四編がま

とまったのでぼつぼつ出版のことを考えようと話し合い、私が出版の手はずを進めることにしていたのであった。

ところが、ここに思いもかけない、山本君が急死するという、まったく想像もできないことが起つてしまったのである。山本君はこの小説を書くために仕事を終えてから、毎日夜おそくまで頑張っていたそうで、あるいはそんな無理がたたって病死するに至ったのではないかとも思われるのである。

死後、心血を注いで書いたこの小説が遺されたのであるから、この小説はいつてみれば山本君の遺書みたいなものだと思う。

山本君は生前「これらの小説について今までの小説と違ったタイプのものにしたい。読んでしまえば後に何も残らないといったものでなく、面白く読めてしかも中に強い主張なり、社会性というものが一本通っているようなものにしたい」としきりに言っていた。この本に収録された小説は皆そういうタイプのものばかりである。

山本君も始めは自分の歩いてきた記録を書くのところがって、小説は難しく、なかなか意のように書けないようだった。しかし、亡くなる一年ほど前からはそれがメキメキうまくなり、また筆も進んだようである。

それにしても、惜しい才能を失ったものである。児童相談業務の上でも、浮浪児のころ児童施設へ

強制収容されたという特異な体験の持主で、しかも専門の心理学を学び、この仕事に情熱を注いでいた将来のホープを失ったことになるが、山本君が生きておれば、新しいタイプの小説家としても大成できたのではないかとひそかに思うのである。

山本君は今や地下にねむっているけれども、死に際して、この小説が出版されない中に他界しなければならぬことが心残りであつたろうと、その心中を察すると涙がこぼれる想いである。けれども文理書院のご好意によってここに出版できる運びになったことは、今までのいきさつから言つて、私としては誠にうれしく、このことを地下の山本君もさぞよろこんでくれるであらう。

この小説の出版を、先ず地下の山本君の霊に報告する次第である。

一九六七年四月

序 文

全国社会福祉協議会事務局次長
青少年育成国民会議運営委員

牧 賢 一

私はこの二十年近く、本職のかたわら保護司として数多くのいわゆる非行少年たちに接して来たが、その経験から痛感していることは、彼等のほとんどが根っからの不良でなく、むしろ本質的には人のいい少年たちで、むしろその親と家庭に問題があるということである。

少年たちの背後にある親たちの無理解、無関心、放任、行きすぎた保護、期待、干渉、甘やかし、きびしい拘束、そして両親の不一致によるバラバラな家族間の人間関係、冷えびえとした荒んだ家庭など。そこから来る歪められた親子関係や家族関係にさいなまれ、温い和やかな愛情や、安住のねぐらを奪われた精神的、情緒的にはまだひよわな少年少女たちが、孤独に絶望し、淋しさに堪えかねて悶え、いうところの非行で精いっぱい抵抗している姿は、むしろいじらしくも哀れとさえ思われるくらいである。

このたび、若くして逝った山本克巳君の遺稿が「記録小説・非行少年」と題して出版されるに当

り、千恵子夫人から序文を求められて、そのゲラ刷りを旅の車中にひろげて読み始めたところ、つい思わず一気に最後まで読了してしまい、深い感動にうたれたのであった。

山本君の児童相談所における児童指導員としての経験はそう長いものではなかったはずなのに、その山本君が非行少年たちとその親たちの心理と行動とをこれほどまでに仔細に、しかも的確に把握して、それを読みものとしてみごとに表現されたことは、驚嘆のほかはない。

昼夜もなき忙しい本務をもちながら、彼をしてよくこれほどまでのものを書かしたものは、その文才によることはもとよりであるが、おそらくは、何よりも彼自身が多くの仲間たちとともに浮浪児や不良少年よと、大人たちからさげすまれ、野良犬のように追われながらもたくましく生き抜いて来た、その経験を通してはぐくまれた同類少年たちへの強い愛情と、心理学を基礎とした深い学問的教養による正しい理解と、そして、彼のもつ本来的な人間愛―事件に関係する少年たちや親たちに対する温い人間味溢れる誠実な思いやりであろう。

本書の三篇の物語りは読みものとしてもスリリングで読むものの胸をはずませるような面白さをもっている。しかし、事実は小説より奇なりで、これらはいずれも単なるフィクションではなく山本君自身が児童指導員として取り扱ったケースの記録ともいうべきものであろう。しかも山本君は非行のケースを学問的にいくつかの類型に分類し、その最も代表的なものを小説的に表現して世の人々に読

ませ理解させようとする遠大な計画をたて、その実行に着手しながら完成を見ずに倒れたのではなかったかと私には思われてならない。その証拠にはこの三篇の物語は、共通性をもちながらそれぞれ異った類型の特色をもっている。おそらく彼には、もっと書きたい、事実の沢山な記録と資料があつたにちがいない。

しかし、この三篇の中にも、非行少年問題に関する多くの課題が十分に示唆されている。これらの記録によって、読者は非行少年なるものの心理の深底と、たんげいすべからざる行動の生態をまざまざと知らされるであろう。そして人の子の親はこの書によって、あらためてわが子とわが家の日常を見直さずにはいられない、新しい眼を開かれるにちがいない。

この書の価値と魅力は、それが非行少年とその親たちを遠くから客観的に眺めた冷静な研究書でなく、その内側に立つて、肌にあふれながら書かれた愛情と真実の書であるということであろう。

昭和四十二年三月五日

序 文

新潟県庁児童課長 風 間 忠 雄

私が初めて山本克巳さんを知ったのは『不屈の青春』を読んでからです。このような人物に是非新潟県の児童福祉事業を推進していただきたい、という願いがかなって、山本さんは昭和三十五年の四月から、上越児童相談所勤務になりました。

当時、私は新潟学園（教護院）の園長をしておりましたが、山本さんは寸暇をさいて時々学園を訪れ、非行対策について時間のたつのも忘れて真剣に語りあったものです。

私が児童福祉行政に転じて最も必要性を痛感したのは、理論と実践力のある指導職員を得ることです、山本さんに白羽の矢をたてて児童課に迎えたのは昭和四十年四月でした。

理想の妻と営んだ円満な家庭、長男について五月には女兒の誕生と、皆に祝福されたのも束の間、私にとってはかけがえのないこの人材が、六月には多くの人々に惜しまれながら、脳動脈粒で急逝されたことは、実に大きな損失であり、今にして山本さんのすぐれた足跡をしのんでいるしだいです。

山本さんは「泣きて泣く者の悩みを知り、暗きに歩みて暗きに歩む者の疲れを知る」ことのできた貴重な体験の持主であり、生々しい児童問題解決のために睡眠時間も惜しんで研究した勉強家でもありました。そして、常に人なつこい笑顔と、温かい思いやりと、謙虚な態度で人に接し、不幸な児童とその親たちの慰めとなり、光となり、地の塩となりました。

特に非行少年の激増を憂えて、非行対策に深い関心をもって研究を進め、複雑で根深い原因を追求して世の人々に訴えるため、すぐれた文筆によって面白く、わかりやすく「記録小説・非行少年」を書きました。

このたび山本さんの遺稿が、千恵子夫人のご熱意と、文理書院のご好意で発行されますことは大きな喜びです。矯正、福祉関係者、教育界は勿論、広く青少年と保護者各位におすすめていただきます。

目

序文

学徒援護会相談所長 岩波 甲三

全國社會福祉協議會事務局次長
青少年育成國民會議運営委員
牧 賢 一

新潟県庁児童課長 風間忠雄

反抗の倫理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

負け犬……………109

レモンのような少年……………175

(続) 不屈の青春……………山本千恵子……………229

あとがき・・・・・・・・・・・・・・寺島文夫：271

反抗の倫理

米山増吉はころよい緊張に身をまかせていた。カパーを取り替えたばかりの議員用の椅子に、びったりと背中をつけて、身体をのぼす。椅子は中央の議長席の真下、右側の角にあった。正面には市長の席がある。今、彼がかけている椅子は最高点で当選した議員のものときめられていた。

「やあ、あんた」

「おめでとう、お互いにまたあえましたな」

誰もが朗らかに胸を張っていた。一年生議員は興奮で頬を赤らめて挨拶に余念がない。顔合せの初議会で議席が定められるのを誰よりも待ちあぐねていたのは、おそらく、米山増吉だった。

「三千二百とは市が始って以来ですって」

「しかし、とったもんじゃて」

どこでも彼の話が出た。彼は微笑して「ありがとう、おかげさんで」と会釈を返して椅子を背筋でなぞまわした。煙草に火をつける。一時間たらずでピースの箱は、すでに空だった。彼の心は満足感に溢れていた。

「とうとう、俺はここまで来たんだ」

実感だった。未来がずうっと開けているという感じがする。この高揚した気分は、五月のからりとした青空のせいだったろうか。

「四十九年かかったんや、ここまでに。しかしまだこれからだや」

彼が少年の頃、家は貧乏だった。父親は肺病で床につききりて死んだ。死ぬまでかん高い声で母

を叱りつけては酒を買わせた。家の中は暗く、住む人も暗かった。けれど母親のおさは増吉を可愛がった。

「おまんは、お天気になると元気になるね」

「さあ、一銭くれるすけ、遊んできない。けがをしないように遊びないや」

おやつといえは、よくてにぎりめしだったから、彼は一銭玉のひやつこい感触を、何回も味わって容易に使わなかった――。

「それでは恒例によりまして、はなはだ僭越ではありますが、しばらくの間、私が仮議長をつとめさせていただきますして、議事をすすめたいと思います」

市議会が始った。十一万の市民を代表する三十六人の議員が、一人残らず顔を揃えている。

こんなことが何回続くだろうか。おそらく三日後には半分程の出席になるのだろうが……。

「米山さん、あなたの新議長は動かんでしょう。三年議員で貫禄も十分だし、何しろ最高点で二位を千票も離しなさんだから」

「いや、私なんかその器じゃありませんわね。まだとても……」

本当に器ではないかと思っているだろうか。とんでもない。米山増吉は午後からの小委員会が、おそらく彼を指名するだろうと考えていた。そうすれば彼は一層大物になるはずだった。

「票は金で買えるんや。だから名譽だつて買えるんさ」

選挙の始る時に、彼は心配性の妻にそう言った。

「あいつ、おれが議長になったと聞いたたら、どんな顔をしやがるか」

仕事は、今ではすっかりうまくいっていた。二軒の料亭、一軒の旅館、もっとも名前はホテル・ホ

クリクというのだが、そしてスーパーマーケットが三つ、パチンコ屋。百人近い従業員を抱え、昔とった免許証は野菜を積んだオート三輪のかわりに、セドリックの新車を運転するのに役立っていた。おふくろに、金儲けの約束をしてから四十年余りかかってしまったが、満足していけない理由はない。なかった。

議会は終り、議長、副議長選挙のための小委員会だけが、午後に持越された。米山増吉が市役所の裏手にある駐車場におりてきたのは、十二時二十分前だった。

「社長、奥さんからの伝言なんですが、よそに廻らないで、まっすぐ家へ帰って来てもらいたいっていうんです」

「まっすぐ帰れ？ 何かあったんか」

「よく知らないんですけど、電話じゃ具合が悪いんだそうですよ。あたしに、何でも社長をおつれして来いっていいなさるんで」

前例のないことだった。少なくともここ数年、仕事が面白いほどうまくいくようになってからは、一度もなかったことだった。不安が心の中をさつとくさめる。彼は頭をふってそれを振り払った。

「見当はつくのか」

ポケットから、キーホルダーを取り出して車のドアを開け、運転席に坐る。若い者はもじもじしながら隣に坐った。

「店のもの話じゃ、高ちゃんのことらしいんですがね」

「高志がまた何かやったのか」